

近代日本における釣竿と生活

一敗戦などによる変化と、

遊び仕事としての釣りー

手塚 一佳

序章

日本における釣りは、古事記にも釣り具を発端とした海佐知毘古と山佐知毘古の争いが記載されている事でもわかるとおり¹、古くから日本に住む人たちの生活と共にあるものである。

釣りは単に食料を得るための漁法であるにとどまらない。明治期に刊行された日本水産捕採誌にも「遊漁（釣りを専ら生活の糧とするのではなく釣りそのものを目的とするという釣魚や漁法）」という単語が繰り返し登場するとおり²、釣りは、生活の糧を得つつも遊ぶ、副業的・祭事的な食料確保の役割を持つ「遊び仕事（日々の生活の中での本業とは関係のない生活習慣からの副業的収入、あるいは祭事的食糧確保の手段・慣習）」として長らく我が国の生活文化と共にあった³。

日本最初の釣りの指導書である「何羨録（かせんろく）」（1723年）において黒石津軽家の旗本津軽采女正政兎（以下、采女）は序章冒頭で下記のように釣りの役割とその生活との連なりを彼一流の美意識と共に語っている。

「古昔隧人之世天下多水故教人以漁（中略）自古至當世好事之者不知幾千万人和漢相若」

「嗚呼釣徒樂一釣絲外也利名輕一釣艇内也生涯恬恬澹無心屢避塵世則仁者靜智者樂水豈其有外乎」⁴

これをここでは「かつて水の多かった隧人（原始人）の天下には漁を持って人を教え（中略）古来より当世に至るまで和漢を問わず幾千幾万の人がこの（釣りという）漁を好んだ事だろう」「ああ、釣人の楽しみは糸で釣る外にある。（それに比べて）利や名誉は軽いことだ。（例えば）釣り船の中も楽しい。我が生涯は淡々と水のように無心に世の面倒を避けて釣を楽しんで行きたい。仁者や静かな智者はただ水の上にある様に釣を楽しむ。こんな楽しみが外にあるのか」と解釈するが、采女の言うように、釣りと

は国や時代や身分を問わず多くの人々を魅了し続けてきた特別な漁であり、食料を得る狩猟でありながらも争いとは遠い、穏やかな生活に極めて近い趣味であると言えるだろう。

釣りとは、生活の糧としての漁業から半歩離れた、生活の糧でありながら趣味として成立している特別な「遊び仕事」であることが見て取れる。

我が国の近現代における釣りと生活との関係をふりかえると、内水面の釣りが頼っている放流事業の放流量の変化に注目せざるを得ない。特に、マス釣り場が各地に出来、国民的なレジャーとして定着してゆき、それが現代に入って徐々に衰退してゆく過程は、内水面の釣りの主力魚種であるニジマスの生産量が、昭和40年代（1960年代～70年代）に1万トンを超えて急速に広まりを見せ、昭和50年代

（1980年前後）には2万トンを超えてピークになったものの、平成5年（1993年）頃から減少傾向となり、平成17年（2005年）には1万1千トン程度にまでまた戻ってしまっている様子から伺い知ることができる⁵。

国立水産研究・教育機構 中央水産研究所の中村の報告では、我が国の2018年の内水面の実釣り人数は336.0万人であり、潜在釣り人数は119.0万人であった⁶。生活の糧としての役割の大きい海水面の釣りと異なり、養殖およびその放流魚を中心とする内水面の釣りは重視すべきレジャーであり、これに同じく内水面を舞台とした釣りである釣り堀・管理釣り場177.7万人を合わせると大変に広い人口を範囲とし得る「遊び仕事」である、という事ができるだろう。

農山漁村文化協会によると「遊び仕事」とは、「最重要とされている生業活動の陰にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている生業」でありながらも「決して本業とはならず」つまり経済的には「頼りにならず」、成果や収穫は「あてにはならず」、作業としては「けっこうきつい」が、いったんその楽しさにはまると「なかなかやめられない」「副次的生業」であるとしている⁷。こうした「遊び仕事」が日本の文化を支えてきたことは否定できず、ちょっとした食糧確保を兼ねた「遊び仕事」は祭事などと密接に結びついて特に高度経済成長による日本全体の均一化までの期間、地域文化の中核をなしてきた。

COVID-19によるコロナ禍で大きな社会変容が必要とされ、人と人の物理的距離が遠いアウトドア趣味が再注目される2021年現在、内水面での釣りなど、生活に密着した釣りの興隆期である戦後1950年代～高度経済成長期の釣り文化の様相を調査分析

することは、こうした遊び仕事としての釣りが、そうした現代の新しい事情に適応し再普及するきっかけになるのではないだろうか。

そこで本論では、近代日本、特に戦後 1950～60 年代期を中心とした釣竿と生活の様相の変化を、単に文献を通じて調査し、実際にその時期に発達した釣り場や釣具に関与した企業や商店、制作者に取材することで、社会の文化的復興成長の大切な一部分としてそうした釣具や釣り場が発展し、とくに「遊び仕事」の道具として、漁労のためと言うよりも、その道具や環境の美しさ、楽しさを重視する方向へと変化が進んでいった様子を明らかにしたい。

第 1 章 日本の釣り文化の発展と遊漁

第 1 節 日本の江戸期までの釣具と発展

日本の釣り文化は縄文まで遡ることができるが⁸、現代に直接繋がる釣具や釣法という、街道の整備で日本全土に流通が安定した江戸期の釣り文化がその直接の原点と言えるだろう。

江戸期の釣り文化については先に挙げた津軽采女正政兜の「何羨録」が著名だ。20 世紀末になってまで当時の原著の複写本がそのまま和綴りで出版され、その解説本も出続けているのだから、時代を超えた超ロングセラーと言えるだろう⁹。

西洋釣り文化において、英国ではジュリアナ・バーナーズの「釣魚論」が中英語時代の最古典（1496 年）の釣り論文としてあまりに著名だ¹⁰。バーナーズは「学識豊かな絶世の美女」といわれながらも何らかの事情で尼僧にならざるを得なかった男爵令嬢であった¹¹。一方、先の「何羨録」を書いた采女は不意の怪我や赤穂浪士事件での義父にあたる吉良上野介義央の討伐など、運としか呼びようのない都合で若隠居同然にならざるを得なかった「生涯をひと口で言い表すとすれば、彼の一生は誰よりも誠実に生き、しかもその一生は誰よりも不運の連続であった」とまで解題者に言わしめた不遇な人生を送った旗本当主であった¹²。両名著共に、社会の上流階級出身でありながら事情により世情の第一線を離れざるを得なかった人物の手になる書物であるのは、釣りの持つ、世俗から離れた立ち位置を示唆している。

この「何羨録」は、本題の江戸前の釣りのポイントと釣り方指南だけでなく、釣法毎の釣具やその作り方、天候の読み方の紹介も行っており、当時の釣りに関する状況を知る上で役立つ書物だ。采女は伝聞は伝聞、自分の経験は自分の経験と明確に記述し

ているところから、本書は采女自身がその豊富な釣りの経験から記したものであることがわかる。

采女は高家吉良家の義理の息子でもある上級武士であり、いくら第一線を離れた身とはいえ日々の食物に事欠くなどは考えられない立場だ。従って、采女の豊富な釣りの経験が食料確保を目的とした漁労でないことは間違いがない。

ここから、江戸期においては純粋に食料確保を目指した漁としての釣りとは異なり、単に食糧を確保するだけで無く、地域毎の魚、漁場を対象として、釣りそのものを楽しむことを目的とした「遊び仕事」としての釣りが存在していたと判断していいだろう。

第 2 節 日本の明治期～昭和初期の釣具と発展

明治期～昭和初期に至る近現代初期においては、先述の明治維新後最初の本格的全国規模釣具調査研究の一つとして、明治 19 年（1886 年）に調査開始され、明治 28 年（1895 年）に完成し、明治 43 年（1910 年）に刊行、昭和 10 年（1935 年）に水産社より書籍発行された「日本水産捕採誌 釣魚編」が広範囲で信頼できる資料として挙げられる¹³。

本捕採誌には、はじめに記述したとおり「遊漁」という語が多用されており、それが各地域の職業的漁法と入り交じりながら紹介されているところに注目できる。ここからも、遊び仕事としての「遊漁」が食糧確保職業としての漁労と無段階に繋がりがつつ、その地域毎の漁労專業度合いに応じて呼び方を変えている姿が浮かび上がってくる。本捕採誌でのこの表記の面白いところは、最終的にはタナゴ釣りのように、明らかにサイズが小さく、一匹一匹のごと釣りでは食用に向く量には至らない魚にまで「遊漁」の範囲が広がる点だ。本書におけるこの展開からは、食糧確保の必要性が下がるにつれて「遊び仕事」の「遊び」の部分が肥大して、やがて純粋な「遊び」に重点を置いた釣りに変化してゆく姿が理解できる。

この「日本水産捕採誌 釣魚編」には冒頭部分に輸出に関しての記述が見られる。竿の輸出数は「東京にて製するもののみにても十五六萬本に至る」とあり、おそらく全国では毎年数十万本に及ぶ輸出数があったことが読み取れる¹⁴。

本捕採録には西洋の毛針釣り道具であるフライフィッシングロッドに関しての記述もあり、商業上の理由として西洋のフライフィッシング用のロッドが「最も上品にして最も高價なるは竹を劈り（わり）膠を以て矧ぎ合せ六角に作りたる竿なり」と推奨されているところから、日本各地でこのフライロッドの模写的な制作が行われていたことが推測される¹⁵。

第二次世界大戦前の朝日新聞記者だった多田一松とその関係者らの言説もあって「日本の六角竿の創始者は多田一松」とされる事が多いが¹⁶、この「日本水産捕採誌 釣魚編」の記述を見る限りに、その言説は少々言い過ぎである可能性が高いと言わざるを得ない。多田や多田の率いる多田釣具製作所は、あくまでも、工業化や大量生産に成功した最初の六角竿製造者の内の一つ、という立ち位置と考えるのが自然だ（図版1）。

また江戸和竿の創始者であり現代の和竿のほとんどの起源であるとされる事の多い「東作」の創始者松本東作やその系譜の泰地屋東作系の和竿に対する記述が「日本水産捕採誌 釣魚編」には一切ないことも、釣具の歴史を追う上では重要だ。明治期の日本全土の釣具を国家的プロジェクトとして総覧する本書に記述が一切無く、江戸和竿についてはただ「享和文化の頃江戸本所中の郷邊に武兵衛と云ふものありて善く竿を造れり、後又利右衛門と云ふもの之に習ふて亦善く造り出し、是より竿の形を改良するに至れりと云ふ」¹⁷と書かれている事実からは「東作」を全ての和竿の祖であるとする現代の東作史観とでも言うべき和竿の歴史認識のあり方への疑問が生まれる。こうした東作史観の一例として、和竿を多く収蔵する週間釣りニュース社「釣り文化資料館」などにも江戸和竿の祖が松本東作であるという展示案内が見られ、江戸和竿の系譜でもそう伝えられる（図表1）。しかし、「日本水産捕採誌 釣魚編」の表現を見るに、こうした現代和竿技術の系譜における「東作」の著名度の成立が明治期以降であったのではないかと考えられる。

また、筆者が過去の研究で長野県木曽谷発祥のイワナやアマゴの毛針釣りであるとして触れた「テンカラ釣り」についても、本書においては加賀の鮎の引っかけ釣りとして紹介しており^{18,19}、筆者が前提としてきた現代の「テンカラ釣り」の認識とここも食い違っていて、命名の起こりも大変に興味深い。

このように同書の内容からは、現代の認識とは異なる明治当時の釣り文化の状況を指し示している可能性も高く、「日本水産捕採誌 釣魚編」は昭和期以降と比較して追加の研究の余地のある資料だと言えるだろう。

いずれにしても、明治期～昭和初期の期間、日本には釣具の製造文化が栄え、江戸期からの各地域毎の伝統釣具を製造発展させるだけでなく、積極的に海外の釣り文化を導入し、また、それらが地域を越

えたいくつかの代表的な釣具の形となって、海外に輸出されるまでになっていたことが見て取れる。

この期間、生活にも釣りは密着しており、各地の釣法を伝え発展させるだけにとどまらず、職能としての漁労ではない「遊漁」として、遊び仕事の釣りが地域を越えて日本全体に発達していった様子もうかがうことができる。

第3節 戦中戦後～高度経済成長期の釣具と発展を探るに当たって

現代に繋がる釣り文化を語る上でどうしても避けて通れないのが第二次世界大戦とその敗戦の影響だろう。

資本主義経済の発展にともない国内の流通や産業が活発化し、前述の「日本水産捕採誌 釣魚編」で示されたとおり、原材料となる中国の竹類の輸入や国産竿の輸出などで日本の釣り文化を発展させる影響をもたらした²⁰。一方で老舗フライフィッシング釣具店である「つるや釣具店」代表の山城良介が著書で「進駐軍（のお土産）向けの六角竿を大量に製造しました（中略）それまで和竿を作っていた国内釣り具メーカーがみんな六角竿に参入してきました」と語っているとおり、その後の敗戦後の連合国軍による日本占領は釣具とその流通のありようを根底から変えてしまった²¹。わずか20余年ほどの間のこの大きな振れ幅は、商売としての釣り道具のみならず、釣具文化そのものを根本から変えるほどの影響があったと想像するに難くない。

しかしこの混乱する終戦直後時代1945年～高度経済成長期の60年代前半を総覧する書籍や資料を指し示すのは困難だ。

この少し前、昭和初期を対象とすれば、朝日新聞社記者松崎明治の記した近現代釣法を総覧する

「釣技百科」もあるが、これは昭和17年（1942年）即ち戦中の刊行であり、さらに前述の多田一松とも同じ新聞社の釣り情報誌面担当の先輩後輩の身内関係であるところから、竹製六角竿、特に西洋フライロッドに関しては中立的な記述は期待できない²²。

釣り場の変化に関して言えば、明治大正までの天然の魚を天然のままに釣る行為からの切り替わりが特筆できる。自然繁殖魚を採る権利を管理する戦前の各種漁業権管理団体から変化した、漁業協同組合の誕生がそれだ。漁業関連団体は、戦中の資源管理のための漁業会を経て、例えば秋川漁業協同組合が昭和25年（1950年）に立ち上げられ、1952年には全国漁業協同組合連合会が立ち上げられたように、

戦後、各地で漁業協働組合が立ち上がっている^{23 24}。これら漁業協働組合では単に漁業権を管理するだけで無く魚の保護管理育成を行った。漁業協働組合、特に内水面の漁業組合はつり人を経営資源と見なし、管理河川において放流事業を行い、あるいはつり人に釣らせるためのエリア、即ち「管理釣り場」を作り上げていった。

このような漁業協働組合の主導する人工的な水面利用による釣りが多数派となったのが、現代の内水面の釣りの平均的な姿であると考えられる。

現代には、例えば群馬県の上州漁協のホームページでは「漁業協働組合が多大な労力を要する放流など漁業資源の増殖を行い、釣り場の管理を実施しているの、河川や湖沼が「釣り場」として必要な漁業資源量を維持することができています」とし「ほとんどの内水面漁協は「漁業者」ではなく「採捕者」である「釣り人」により構成され・運営されています」と、趣味の遊漁者が漁協の主体である現状を断言するに至っている²⁵。

この状況の中での釣具の発展は、職業的な漁労から離れ、「遊び仕事」として自然に趣味的な傾向を帯び、より美しく、より楽しく変化をしてきたのではないかと予想される。

そこで、次章では放流管理された釣り場の代表格である管理釣り場と、釣具メーカーの両者を訪ね、その取材から経緯を探ってみたい。

第2章 管理釣り場から見た戦後の釣り文化

第1節 日本の管理釣り場とフライフィッシングの始まり（養沢毛鉤専用釣場の事例から）

釣り堀の中でも、河川や池沼などを区切り、大規模に放流を行って釣りを楽しむ「管理釣り場」の存在は、日本の戦後の釣り文化を代表する特徴だ。特に内水面においては、埼玉県が「河川は生産力が低く、漁獲により魚類資源の枯渇が心配されます」とその広報に書くほどに漁業資源が不足する日本の事情から、漁業協働組合による放流と合わせて、釣り文化には欠かせない存在と言える²⁶。

管理釣り場のその端緒は、東京都あきる野市にある養沢毛鉤専用釣場ではないかと考え、同釣り場の高橋実理事長の取材許可の下、窓口担当のスタッフを中心に2021年4月20日に聞き取り取材を行った。

養沢毛鉤専用釣場は、戦後、教育勅語関連諸法の民主化に尽力した元 GHQ の民法担当官トーマス・レスター・ブレイクモアが1955年に開設した

釣り場である（図版2）。

その前にも日本にはフライフィッシングの釣り場は日光の湯川と湯の湖、山梨県の忍野川などがあったが²⁷、いずれも天然の川に米軍をはじめとする日本占領進駐軍が魚類を放流しただけのもので、管理者が責任を持って利用者から料金を取り、計画的に放流管理する「管理釣り場」としては、養沢毛鉤専用釣場が全国初となる。

釣り場のスタッフの話によれば、養沢毛鉤専用釣場のある現あきる野市周辺には横田や立川の米軍基地があり、そうした米軍基地の日本駐留が、占領統治下の後も半恒久的に継続することが決定したため、その関係者、特に上級将兵の交流・レクリエーション施設の設置が至急の課題であったようだ。上級将兵は富裕層出身であることが多く、そのため、米国でも上流層の遊びであり、ブレイクモア自身も趣味としていたフライフィッシングに着目して本施設を設立した。

養沢毛鉤専用釣場は米軍将校や米国、国連幹部を主な客層に想定していたが設立直後から日本人客も歓迎していたのも特徴だ。

戦後の様子を指して「みんなが食べるのに必死で釣りを楽しもうという雰囲気じゃ無かった」という状況であったが²⁸、敗戦から10年でようやく釣りを楽しむ施設が日本にも出来たことになる。

ブレイクモアはあくまでも GHQ の担当官として来日したため、当釣り場開設の1955年には既に公職を降りて民間に下っていた。同時期、ブレイクモアは日本の永住権を得て日米両国にトーマス・ブレイクモア法律事務所を開くなど、積極的に民間レベルでの日米友好を目指す活動を行っていた様子が窺える。その日米友好活動の一環として、米軍将兵のみならず、日本人にも広くフライフィッシングを伝道する意味でも、ブレイクモアは私財を投げうってこの養沢毛鉤専用釣場設立に尽力したとのことであった。

多摩川水系秋川の支流である養沢川のうち、全長4kmに渡る広大な区間を毎年3月～9月までの期間釣り場として指定し、所々に駐車場とトイレ、釣り場への階段やはしごを設置し、その全域にわたって毎月1～2度程度の放流を行うのが、養沢毛鉤専用釣場の管理方法だ。利用者は一日券を購入してこの区間を自由移動して釣りが出来る。放流魚は米国人の好むニジマスだけでなく、日本固有の溪流魚ヤマメを主に放流しており、その放流効果の調査と放流のめどを調べるために、アブラビレに標識を付けたヤマメを毎年放流し、その標識を報告した釣り人に調

査協力の返礼として記念バッジを渡す仕組みを1980年から維持している。このヤマメバッジを手にすることが養沢毛鉤専用釣場をホームとして釣りを楽しむ者の誇りであり、2012年4月に放火によって養沢毛鉤専用釣場の事務所が全焼してしまったときには、熱心な利用者から歴代のヤマメバッジの寄贈があった（図版3）。ヤマメバッジは七宝焼きによる丁寧な仕上がりで毎年デザインが変わる。

魚の持ち帰りには匹数制限があり、2021年4月段階では、1日券で8匹までの持ち帰りとのことだ。

この養沢毛鉤専用釣場は、当初から地元の協力と、将来的には地元による自主的な運用を念頭に置いて設立されたという。事実、現在では、この養沢毛鉤専用釣場は地元住民が理事に就任する「トーマス・ブレイクモア記念社団」により運営されており、この社団の理事や幹部スタッフは歴代無給で業務に当たっている。

ブレイクモアは1995年療養中の米国にて死去したが、窓口のスタッフや釣り場整備スタッフは今でもブレイクモアを「トーマスさん」と呼び、彼が亡くなってから四半世紀以上たつ今でも親しみを込めて語る様子が随所で見受けられた。

養沢毛鉤専用釣場では、フライフィッシングに加え、日本の伝統的な釣法であるテンカラ釣りも可能となっている。ここで言うテンカラ釣りは前述の加賀の鮎引っかけ釣りでは無く、一般的にテンカラ釣りが指し示す用語である毛鉤によるヤマメなどの小型マス類を対象とした釣法のことであり、この1955年時点で、テンカラ釣りといえば小型マス類の毛鉤釣りになっていたことが窺い知れる。

スタッフによれば、ブレイクモアは、晩年はフライフィッシングよりもこのテンカラ釣りの方を好んでいたとのことで、この養沢毛鉤専用釣場における釣り文化交流が決して先進国である米国から敗戦国日本への文化伝達と行った一方的なものでは無く、相互的なものである事がわかる。

この養沢毛鉤専用釣場からは、戦後、釣り文化が米国関係者の関与によって大きく様変わりした過程が残されていた。また、それら米国文化が日本の既存の釣り文化と混じり合ってゆく過程が観察された。

第2節 一般日本国民向け釣り場の始まり（早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸の事例から）

元々米軍将兵を主な顧客層と想定して開始されたマス釣り場は「国際」マス釣り場と自称する傾向があるが、その「国際マス釣り場」の中でも古参の一

つが、この「早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸」だ（図版4）。

そこで2021年6月6日に、早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸、新井健太代表に取材した（図版5）。

相模川水系早戸川を1.5km近くにわたって区切って作られた早戸川国際マス釣り場は昭和39年（1964年）4月設立。当時は早戸川国際マス釣り場のみの設置で、あとからルアーフィッシングやフライフィッシングのブームを見て、リヴァスポット早戸を併設した、とのこと。

新井健太代表の父親新井福平前代表が第二次世界大戦直後から米海軍（厚木基地、座間基地など）向けの魚の卸をやっており、その縁があつてマス釣り場を始めたという。

設立に当たっては、米軍を経由して、前述のトーマス・レスター・ブレイクモアの日本人秘書複数名の助力があり、養沢毛鉤専用釣場のノウハウを学びつつ河川型の管理釣り場を設置したという。

養沢毛鉤専用釣場は上級将兵用のレクリエーション施設だが、早戸川国際マス釣り場は一般将兵や日本人向けとして考えられており、簡易な餌釣りを簡素な竹一本モノの貸し出し竿で行うという餌釣り場のスタイルは、設立当時からのものであるという。

対象魚は、米軍将兵が好むニジマスを中心とするが、イワナやヤマメなど、様々な魚を放流しており、漁法は、早戸川国際マス釣り場が餌釣り、リヴァスポット早戸がフライとテンカラ、ルアー釣り限定、とのことだ。

早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸の最大の特徴は、急流を利用した難しい釣り場ながらも魚の持ち帰り匹数に制限がないことで、大型魚が多く放流されることもあり、腕自慢の釣り人が日本各地から集まる要因となっている。

現在も引き続き米軍基地関係者は多く来場しているが日本人客の方が圧倒的に多い。これは、開設当時から徐々に比率が変化したものであり、早戸川国際マス釣り場側ではとくにその比率の変化の統計などは取っていないという。

本調査で判明した早戸川国際マス釣り場開設以前からの米軍との関係は、当時の日本各地での「国際マス釣り場」設立が、米軍のレジャー要求の動向にあわせたものだった事を示唆している。

また、釣場の方針として釣具にはこだわりはないとしながらも、釣法ごとに釣り場を分けるなど、釣

り人の生活に密着しつつもこだわりのある釣り方を推奨していて、戦後～高度経済成長期における日本の内水面釣り文化が、釣具の変化と共にあったことをうかがい知ることができる。

この早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸では、大型魚を釣り上げた場合、持ち込み釣具と一緒に記念写真撮影を行うことによる道具自慢ができる。また、常時放送される「引っかけ釣り禁止」といったジェントルマンシップの要素など、ただ魚を釣るだけでは無く、釣り文化の発展も意識した運営をしている。釣った魚を調理してくれる食堂などを中心に交流地点としての役割もあり、ここから、筆者が以前取り上げた現代の冬期プールフィッシングや後述するプライベートポンドなどの交流メインの釣り場へと役割が繋がっている点も特記すべきだろう²⁹。

また、本取材に関し、新井健太代表は遊びとしての釣りを下記のように語った。

「今は（昔と違い）父親が釣りで遊んでいないので、その子供たちも当然に釣りに関わらなくなっています。もちろん、昔と違って今はレジャーがたくさんあり、そのうちの一つとして釣りがある状況なのは理解しています。

しかしそれにしてもこういう面白い遊びが知れないのは残念ですね。」

この言葉からは、遊びとして、レジャーとしての釣りが徐々に衰退している現状が窺える。特に、新井健太代表と同年代の団塊の世代がアウトドア活動で活躍できる年齢では無くなりつつあり、釣りを趣味としていた人たちが大きく減少している状況がある。

新井健太代表の言葉にも釣り人口の減少の指摘があるが、単に釣りに関わる人口が減っているというだけでなく、管理釣り堀そのものの変化も着目すべき点だ。

価格面や設備などを見るに、現代の管理釣り場として、常設の高級レジャーとしての設備が充実した管理釣り場と、祭りなどで臨時開設の釣り場やその延長にある冬期プールフィッシングのような設備に力を入れない、自然河川への漁業協同組合放流よりも多少よく釣れる事を目的とした安価な管理釣り場に二分化しつつある様だ。

現に、2021年4月現在で、前述の養沢毛鉤専用釣

場は1日4500円、早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸は1日4700円と、いずれもちょっとした遊園地並みに高額だ。また、それに比べてお盆などに設置されるマス釣り場は木曾町日義地区の夏祭りで1000円、冬期プールフィッシングは、埼玉県の県営プールで1日2620円と常設型管理釣り場よりも格安だ。この臨時設置管理釣り場の価格帯は、漁業協同組合の管理する放流河川の一日券が例えば諏訪東部漁協で1200円程度である事を考えると、自然河川の釣りにかかる費用を参考にしているものと考えられる。

高級路線の常設型管理釣り場はさらに発展し、少人数の会員だけで年間定額費用を払い、釣り人をその人数のみに制限した上で管理釣り場を運営する、プライベートポンドというスタイルも出てきている（図版6）。

遊びに特化したプライベートポンド等のような高級釣り場と、食に密接し開かれた「遊び仕事」の管理釣り場との共存が、今後の釣りレジャーの一つの姿であると考えられる。

第3章 釣具製造販売店から見た戦後の釣り文化

第1節 進駐軍とお土産竿（櫻井釣漁具株式会社「神田釣り具の櫻井」の事例から）

釣り文化の変化を追いかける上で、釣り場の他にもう一つ、釣具の変化も欠くことが出来ない要素だ。

特に戦直後1945年～1960年代前半に注目すると、前述のとおり、敗戦後の占領軍～在日米軍相手のお土産釣り竿の重要性に気づかされる。

この土産物釣り竿がどういった経緯で誕生し、それがどのように釣り文化に影響を与えたかを調べるため、明治期から釣具を製造販売している櫻井釣漁具株式会社「神田釣り具の櫻井」の石川潜城店長に2021年4月13日に取材した（図版7）。

櫻井釣漁具株式会社「神田釣り具の櫻井」は、櫻井信太郎が1888年（明治21年）に創業し、現在でも竹製漆塗りの伝統的の竿をはじめ、最新のカーボンロッドまで国内外に製造販売しているメーカーだ。小規模な世襲の竿師やその販売はともかく、複数の製造スタッフと製造ラインを持つ中堅以上のメーカーの中では最古参の1社ではないか、という。

同社は、創業当初はテグス等の小物を中心に販売し、そこから鮎竿をはじめとして鮒竿、キス竿など、和竿全般の製造販売を行うメーカーになったという。西洋竿にも戦前から着手し、西洋ルアーフィッシン

グ及びフライフィッシングに使う六角竿に関しても戦前から製造販売していた、とのこと。

店舗には販売のための店員も常駐しているが、それ以外に同じ建物の別フロアで釣具製造をしている同社社員の和竿職人や竿製造担当者が出入りし、凝った注文の来客があると、顧客と職人が直に話し、好みの竿を作り上げてゆく。昔ながらの家内制手工業の職人と企業制工業の両者を行き来しているような独自のビジネススタイルを取っている。和竿としては「江戸川」と「江戸藤」の2つの和竿師名をもっており、その時代時代の最も腕の優れた社員2名がその2つの和竿師名のいずれかを襲名するスタイルでやってきている。

顧客と製造スタッフの距離が近い関係から、同社の竿には、和竿のみならず、カーボンロッドにも現場顧客の実釣での声が色濃く反映されているのが特徴だ。看板のキス竿はもちろん、海外での流行に合わせて製造販売しているテンカラ竿ですら、例えば「金剛」シリーズなどでは、和竿の雰囲気や曲がり調子を意識し、同社製の和竿とカーボン竿のその両方を所有しているユーザーが違和感を持たないような作りを心がけているという。

六角竿に関しては、戦直後製造の占領軍及び米軍向けお土産の同社製「コンビネーションロッド（フライフィッシングとルアーフィッシング両用の切り替えロッド）」のセットが店舗入り口に展示されている（図版8）。リールこそ時代の流れで紛失しているそうだが、桐箱入りの見事な高級釣具セットだ。お土産屋や海外向けには同社は「SAKURA」というブランドで展開しており、このSAKURA製のコンビネーションロッドは数万本を売り上げて大ヒット商品となったとのことで、実際、1万本販売記念のトラック積み込み写真が店頭で展示されていた。

進駐軍のお土産ブームに乗って製造販売された他社六角竿製品は実用に耐えない見た目だけのロッドやとても投げる事が出来ない出来の悪い釣り糸が多かったそうだが、同社神田釣具の櫻井では、実用竿として戦前から六角竿を国内外向けに製造販売していた実績があり、きちんと使えるものを出していたことがこの大ヒットの秘訣だったのではないかと。同社製の六角竿は戦前から経験のある柔軟性の高い真竹製であり、硬度の高い輸入竹に頼った堅くて釣り仕掛けを飛ばしにくい他社製品とはその点でも一線を画していたようだ。

また、ソフトベイトと呼ばれる、柔らかい樹脂製のルアー疑似餌を製造販売したのは、同社が世界初

であるという。こうした工夫があるからこそこの大ヒットだったのだろう。

また、この日本最古の釣具製造販売店の一つである「神田釣具の櫻井」が六角竿を戦前から製造販売していた、という調査結果を見るに、多田一松が日本の六角竿の元祖であるという書籍など³⁰で紹介されやすい前提には疑問符が付く。多田はあくまでも初期の六角竿分野開拓者であり、その主要な一角であった、と認識しておくのが正しいだろう。

この櫻井釣具株式会社「神田釣具の櫻井」の取材調査からは、前述の明治期「日本水産捕採誌 釣魚編」の調査の正確性が窺い知れる³¹。

たとえば、六角竿は戦前から国内及び輸出向けに作られている。これは、六角竿の歴史が昭和20年代後半だとする説を否定し、日本における六角竿の製造開始を大きく遡らせる内容だ³²。

またこの神田釣具の櫻井のように東作の系譜に拠らない和竿製造が明治当時には一般的であったのであれば、同書に特に東作の記載が無かったのも納得できる。東作は四代目東作である松本政次郎が戦後期に大成功をして多くの弟子を取ったことで知られるが³³、このあたりで和竿の系譜に関して認識の変化があったのではないだろうか。

この視点で資料を見返すと、昭和中期頃までの四代目東作の時代までの東作の広告には「継竿の創始者初代東作」と銘打っており、宣伝文句であっても江戸和竿全体の創始者とは決して名乗ってはいない。昭和中期までは東作本家側から見ても、数多くある江戸和竿の系譜の中での継ぎ部分の技術の創始者の系譜という自己認識であったと見て良いだろう³⁴。

東京の人々にとって、魚釣りは無くてはならない趣味であり、その道具は実用と美しさの両面で評価されていたことが、江戸前の釣りを主眼に置いた同社の歴史からわかる。また、現在でも多くの釣具の輸出が行われていることから、実用と美を兼ね揃えた姿勢が長年海外にも評価されている事がわかる。

釣具に必要なのは単に魚を捕るだけでないということが、この取材から学べる。

第2節 六角竿とフライフィッシングロッド（株式会社レオン フライロッドビルダー 三浦洋一氏の事例から）

現代の釣具の中でも竹製手作りでありながら最新釣具とその性能にも対抗できている釣具として、フライフィッシングロッドが挙げられる。英国発祥の毛鉤釣りであるフライロッドは、前述の「釣魚論」

や「日本水産捕採誌」の描写を見てわかるとおり長らくトリネコやヒッコリー、ハシバミなどを削り出した木製であったが^{35 36}、近代、世界物流が盛んになると同時にはじめはインドからカルカッタケンが、やがては中国や明治開国後の日本などからトンキンケンや真竹、孟宗竹が盛んに輸出され、特に米国で竹製のフライフィッシングロッド、バンブーロッドが作られるようになった³⁷。

このバンブーロッドやそれに関する釣具は現代の日本でも盛んに作られており、国内にとどまらず世界中に輸出されるなどの高い評価を得ている人物や製造元もある。そこで、製造した竿やリールが高く評価され、その竿作りの治具においても大きな国内シェアを取る株式会社レオンの三浦洋一代表に2021年4月25日に取材した（図版9）。

埼玉県加須市にある株式会社レオンは元々三浦代表の父親の代から鉄工所を開設して居た関係で、機械工作精度が特徴のフライロッドビルダーだ。1995年頃からフライフィッシング関連の制作を開始したという。

レオンが名を馳せたのは、元々はクラシカルなフライフィッシング用リールの制作で非常に高い評価を得たことによる。極めて軽量で正確、かつ、デザイン的にも優れた美しい側面板のリールは、世界中で模倣リールが出るほどの人気となった。

そこから、2000年前後には三浦代表自ら中国に渡って竹を仕入れてくるなどで良質のフライロッド材料を揃えるようになり、今では鉄鋼技術を生かしたプレーニングフォーム（6角に割った竹を削り込むための削り込み用の型）などは事実上国内シェアを独占している。日本のフライロッド制作では2021年現在無くてはならない一角を担うフライ関連ショップであると言える。

三浦代表自身は寡作家で三浦の銘入りフライロッドが大量に作られて大量に売られる、という性質のフライロッドビルダーではないが、その作家性は非常に高い評価を得ており、著名な面々が著述した前述の「バンブーロッド教書」にも記事を一節持っているほどである³⁷。

レオンの店内にはフライロッドやリールの完成品だけでなく、ロッドを作るための道具類も豊富に揃っており、フライロッドビルディングの道具が簡単に揃う店舗となっている。また、店内には商品以外にも歴史的に珍しいフライロッドも展示しており、例えば、戦後進駐軍向けに作られたお土産用の「ゲイシャロッド」は、その美しい漆塗りの仕上がりで、

ゲイシャロッドはお土産用の不出来なものであったのではないかなどという思い込みを一目で払拭してくれる（図版10）。

三浦代表の活動として、フライロッドメイキングスクールがある。全5回5日間の通いでトンキンケン（チャカンチク）の丸竹から削り出し、最終的に一本のフライロッドに仕上げてしまうこの教室は評価が高く、プロ・アマチュアを問わず多くのフライロッドビルダーがこの教室の出身者である。筆者も本来5日間のところ居座り続け、足かけ4ヶ月にわたって毎週末に教を請うた経験がある。三浦代表は「魚釣りの最高の喜びは自分で道具を作ることであり、竿を自分で作らないのは楽しみの半分を自ら捨てているに等しい」という主張の下この活動をしているが、確かに、それはフライフィッシャーがフライタイイングで魚を釣り上げることに喜びを感じることから理解できる理屈である。「自ら遊びに使う道具を工夫して作る」というのは、遊び仕事としての魚釣りを考えた場合、大きな要素の一つと言えるだろう（図版11）。

三浦氏の遊び仕事は単に自らフライロッドを制作するだけでなく、その原材料にも及ぶ。三浦氏を指して「どんな竹でもフライロッドにしてみようという遊び心一杯」の人物とフライフックタイヤー（フライ毛鉤作りのプロ）の島崎憲司郎は評しているが、まさにその言葉どおり、ありとあらゆる様々な竹を使ってフライロッドを作り上げてしまうその技術と好奇心は、非常に評判が高い³⁹。中でも真竹によるフライロッド制作の試みは2021年のコロナ禍で中国からトンキン竹が輸入できなくなってから重点を置いている取り組みの一つだが、これは、人口減少と高度高齢化による里山崩壊とそれに伴う放置竹林が問題となる我が国の現状を考えると、生育が早い様々な工芸品に有用であった反面、その性質上極めて有害な植物の一つでもある真竹に有用性を持たせる取り組みでもあり⁴⁰、環境保護の面からも評価できる。

三浦代表は自らが釣った魚は全てリリースするキャッチアンドリリースを徹底しているというが、魚自体を食べなくとも、道具作りと専門ショップという広義の釣りというジャンルで生計を立てているわけで、まさにこれも遊び仕事としての釣り、と言えるのではないだろうか。

終章

ジュリアナ・バーナーズや津軽采女正政兜の例を歴史に見ても、釣りというジャンルは洋の東西、時

代を問わず、本業とは別に、人の心や生活の支えとなる文化的側面を持つことがわかる。

明治期の「水産捕採誌」を見る限り、我が国にも非常に豊かな釣り文化が存在しており、またそれらが積極的に海外に輸出され、あるいは反対にフライフィッシングなどの海外釣り文化が輸入されていたことがわかる。

そうした釣り文化のキーワードの一つが「遊漁」という伝統的な行為であり、これは、生活の主な収入源にならない、漁労とはまた別の副収入（マイナーサブシステンス）であることがわかる。ここからは即ち、釣り文化の持つ「遊び仕事」の要素が強く見えてくる。

日本の釣り文化は日本の敗戦により大きく変容を余儀なくされてしまったが、戦後には早速占領軍である米軍の持ち込んできた釣り文化との交流が発生し、中でもトーマス・レスター・ブレイクモアの作り上げた「養沢毛鉤専用釣場」は日本における管理釣り場のモデルケースとして誕生し、養沢の地に根付いて地元の人々の「遊び仕事」として発展継承されてきた。

養沢毛鉤専用釣場をモデルとして各地の管理釣り場も発達し、例えば「早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸」は元々の米軍相手の管理釣り場から無段階に国内庶民向けの釣り場へと移行しており、日本の戦後釣り文化を支えてきている。

反面、少子化とレジャーの多様化によって日本の釣り人口は減少してきており、その回復手段、あるいは釣り文化そのものの継承手段が問われるようになってきている。その状況下で、高級プライベートポンドによる釣りの行為そのものを楽しむキャッチアンドリリース中心の釣りと、催事的な子供ファミリー向けの取って食べるための各地の夏休みの釣り堀としての釣りの二分化が進んでいるのが現状だ。

この背景の中「櫻井釣漁具株式会社」では、和竿職人が社員として常駐しているという環境を生かして既存の和竿技術を応用してカーボン竿を作っており、また、和竿の伝統である顧客と職人の距離の近さから、顧客の要望を積極的に取り入れて満足度の高い竿作りを行って日本国内はもちろん、世界的に高い評価を得ている。

また、フライフィッシング専門店「レオン」では、三浦洋一代表の「魚釣りの最高の喜びは自分で道具を作って釣ることであり、竿を自分で作らないのは楽しみの半分を自ら捨てているに等しい」という主張の下、フライロッドメイキングスクールを開催しており、このワークショップを経てフライロッドメ

イキングのプロになる者も複数出ていて、裾野を広げる事に大きく貢献している。他にも三浦氏は様々な竹を用いてのフライロッドメイキングに取り組んでおり、中でも邪魔者扱いされやすい真竹によるフライロッドは人口減の日本の里山の状況を考えた場合、非常に重要ではないかと考えられる。

いずれにしても、本論をふりかえると近代日本における釣具の発展は、釣りが持つ、遊び仕事という本質と常に共にあったことがわかる。

この本質は、単に「食のために行う副業的且つ祭事的採取行為」という伝統的遊び仕事の枠を超え、たとえ釣った魚を食べなかった場合でも「副収入的、あるいは本業に近いくらいに打ち込めるだけの熱量を持った趣味」という新しい遊び仕事の枠組みを「釣り」という行為に与えるものではないだろうか。

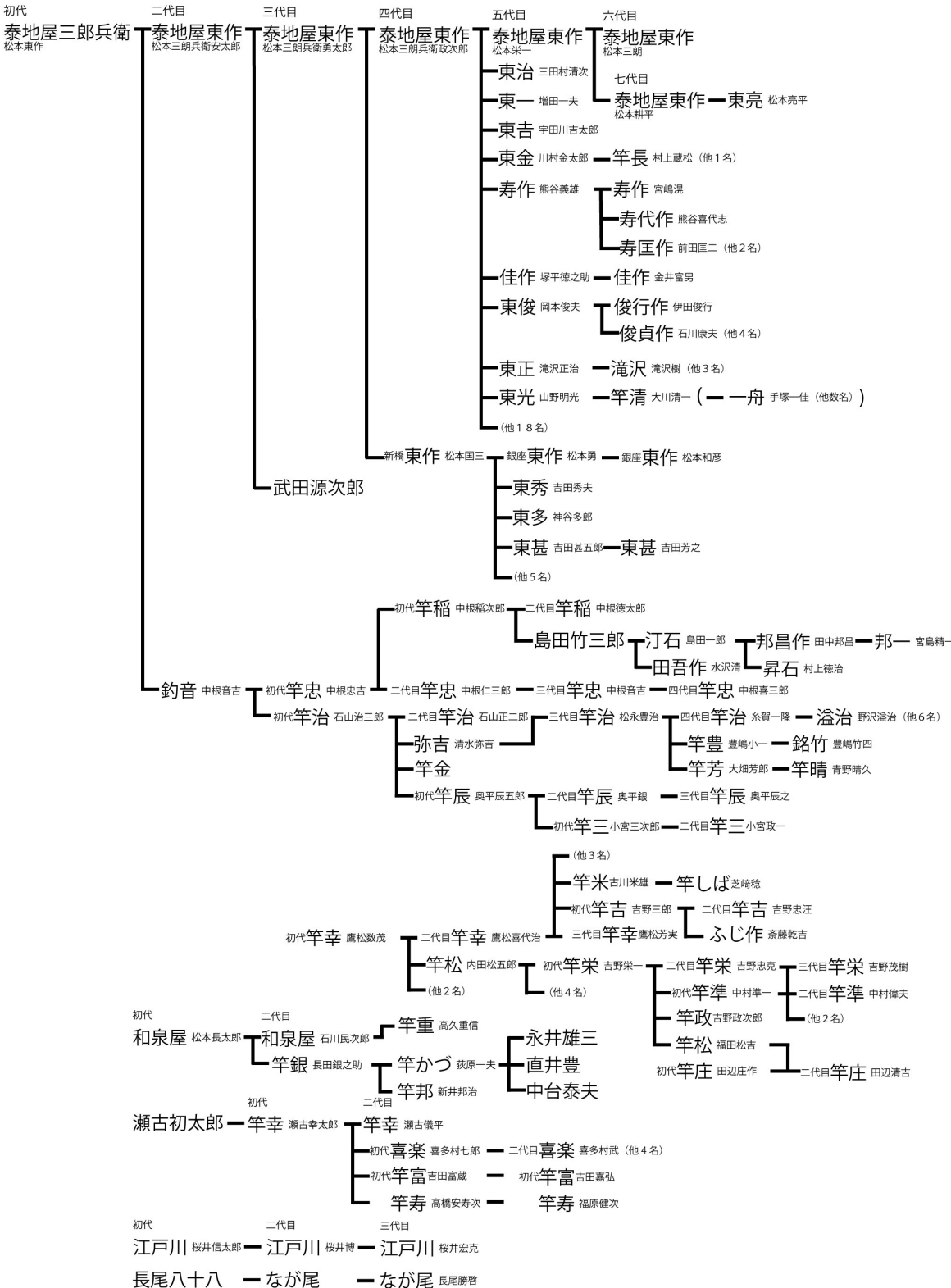
謝辞

本稿執筆にあたり、株式会社週間つりニュース釣り文化資料館小谷友樹氏、トーマス・ブレイクモア記念社団養沢毛鉤専用釣場高橋実理事、早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸新井健太代表、蓼科東急フライフィッシング倶楽部大島秀行事務局長、櫻井釣漁具株式会社石川潜城店長、株式会社レオン三浦洋一代表、和竿教室大川ラボ大川清一代表、竿政竹竿製造店田村政孝和竿師、有限会社丸六宇留賀誠取締役、有限会社アイラ・ラボラトリ橋本修平取締役には、取材や論文素材準備において大変お世話になりました。また、京都芸術大学 伊達仁美教授、松井利夫教授には、取材及び論文執筆において大変熱心にご指導頂きました。皆様に深く感謝申し上げます。

注・引用文献

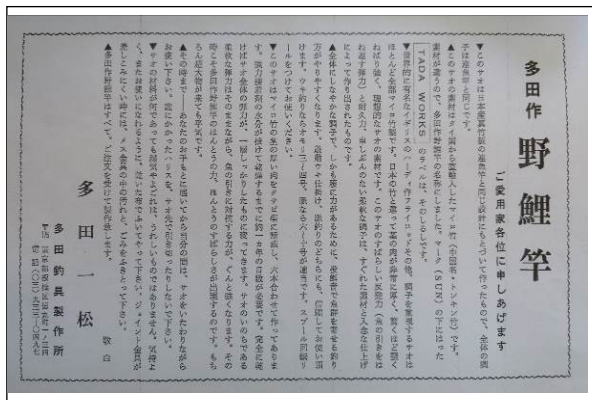
- 1 稗田阿礼 太安万侶『古事記』倉野憲司 校注、岩波文庫、1963 年、p. 268
- 2 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』農務省水産局編纂、東京水産社発行、1935 年、p. 75、111、123 他
- 3 手塚一佳「遊び仕事としての伝統釣法「テンカラ」ーその伝承と道具に関する研究及び制作ー」京都芸術大学大学院紀要、1 号、pp. 488 - 530、2021 年
- 4 津軽采女『何羨録〈復刻〉』中村利吉 写筆、釣り文化協会、1981 年、p. 1
- 5 「富士養鱒場だより」静岡県水産・海洋技術研究所 富士養鱒場、195 号、2007 年 7 月
- 6 中村 智幸「日本における海面、内水面および内水面の魚種別の潜在釣り人数」日本水産学会誌、86(3)号、pp. 214-220、2020 年
- 7 「農文協の主張」、現代農業、農山漁村文化協会、2006 年 9 月
- 8 笹本正次ら「川・湖沼の恵と縄文人」信州の風土と歴史 23 川、長野県立資料館刊、2017 年、pp. 36-37
- 9 津軽采女前掲書 (4)
- 10 ジュリアナ・バーナーズ「釣魚論」(Dame Juliana Berners “a Treatyse of fysshynge wyth an Angle” Boke of Saint Albans)』、椎名重明 翻訳、つり人社、つり人ノベルズ、1997 年、pp. 9-82
- 11 ジュリアナ・バーナーズ、椎名重明前掲書 (9)、p. 6
- 12 勝部直達『何羨録・現代語訳と解題』甲山五一 現代語訳、釣り文化協会、1981 年、p. 51
- 13 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (2)
- 14 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (2)、p. 79
- 15 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (2)、p. 80
- 16 山城良介「日本のバンブーロッドの発展史とその魅力」フライの雑誌社編『バンブーロッド教書』フライの雑誌社、2013 年、pp. 182-191
- 17 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (2)、pp. 78,79
- 18 手塚一佳前掲論文 (3)
- 19 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (2)、pp. 137-139
- 20 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (2)、pp. 74-82
- 21 山城良介「日本のバンブーロッドの発展史とその魅力」前掲 (16)、pp. 182-183
- 22 松崎明治「釣技百科」朝日新聞社刊、1942 年
- 23 秋川漁業協同組合ホームページ
<https://akigawagyokyo.or.jp/trout/> (閲覧日 2021 年 6 月 28 日)
- 24 全国漁業協同組合連合会ホームページ
<https://www.zengyoren.or.jp/about/message.html> (閲覧日 2021 年 6 月 28 日)
- 25 特定非営利活動法人「鮎釣りステーション」ホームページ 群馬県
http://www.kiddy.co.jp/ayunip/gunma_info/joosyu_report5-3.htm (閲覧日 2021 年 6 月 28 日)
- 26 埼玉県ホームページ 水産業 Q&A
<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0904/suisanfaq/index.html> (閲覧日 2021 年 6 月 28 日)
- 27 「特別座談会 日本のフライフィッシングの軌跡」フライの雑誌、フライの雑誌社、第 61 号(2003)、p.10
- 28 「特別座談会 日本のフライフィッシングの軌跡」前掲 (27)、p.5
- 29 手塚一佳前掲論文 (3)
- 30 山城良介前掲記事 (16)
- 31 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (2)
- 32 鈴木秋水『和竿作りの本』築地書館、1999 年、p.26
- 33 葛島一美『続・平成の竹竿職人 焼き印の顔』つり人社、2007 年、P.10
- 34 葛島一美『続・平成の竹竿職人 焼き印の顔』前掲書 (32)、P.14
- 35 ジュリアナ・バーナーズ、椎名重明前掲書 (9)
- 36 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (2)
- 37 錦織則政『ザ・ヒストリー・オブ・バンブーフライロッド バンブーロッドとその開拓者たち』つり人社、2013 年、p.10,11
- 38 三浦洋一「理想の竹を探して」フライの雑誌社編『バンブーロッド教書』フライの雑誌社、2013 年、pp. 204-209
- 39 島崎憲司郎「竹林へ 13 年語の追記」フライの雑誌社編『バンブーロッド教書』フライの雑誌社、2013 年、pp. 244-247
- 40 島崎憲司郎「13 年語の追記の追記」フライの雑誌社編『バンブーロッド教書』フライの雑誌社、2013 年、p.247

江戸和竿師系図



釣り文化資料館及び釣具の櫻井、大川ラボでの聞き取り調査を元にする。括弧内は筆者の系譜位置

図表 1 江戸和竿師系図（筆者作成）



（図版 1）多田釣具製作所六角竿添付文面 株）レオン所蔵
トンキン竹は中国でしか産出されないため、タイ国産マイ
ロ竹（中国名 トンキン竹）という明確な間違いがあるが、
多田の六角竿が輸入竹で作られていたことがわかる。



（図版 2）養毛毛鉤専用釣場
この事務所建物は 2012 年の放火後再建されたもの。看板
に「トーマス・ブレイクモア記念財団」の文字がある。



（図版 3）養毛毛鉤専用釣場ヤマメバッジ
養毛毛鉤専用釣場では放流したヤマメの一定割合のアブ
ラビレに標識を入れ、放流効果の調査をしている。標識ヤ
マメをつり上げた報告に対してはバッジを渡している。



（図版 4）早戸川国際マス釣り場
早戸川国際マス釣り場は川を石で区切ってマスを釣らせ
るスタイルの管理釣り場だ。自然川そのままの養沢とはま
た違うスタイルといえる。



（図版 5）早戸川国際マス釣り場新井健太氏
早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸
二代目オーナーの新井健太氏。



（図版 6）蓼科東急フライフィッシング倶楽部
極めて限定的なプライベートポンドは、
内水面の釣りの新しい姿の一つだ。



(図版 7) 櫻井釣漁具株式会社「神田釣り具の櫻井」
店内には和竿からカーボン製の現代竿まで、様々な同社製の竿が並ぶ。竿材料の竹や漆などもある。



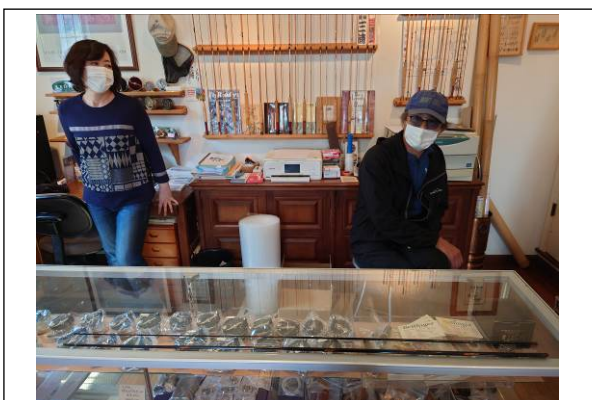
(図版 10) 進駐軍向け「ゲイシャロッド」(レオン所蔵)
大変に見事な漆塗りだ。



(図版 8) 「SAKURA」ブランドの進駐軍土産用六角竿
「神田釣り具の櫻井」入り口に展示された。進駐軍土産用六角竿。国産真竹製。



(図版 11) レオンフライロッドメイキングスクール
5日間のスクールでフライロッドを仕上げる。当スクール出身のプロも多い。



(図版 9) レオン店内
壁面にはフライロッドの並ぶレオン店内
ガラスケースにはレオンリールが並ぶ。

Fishing Rods and Common People's Life in Modern Japan
- Changes due to the defeat in World War II,
and fishing as a minor subsistence in Asobi-Shigoto -

Kazuyoshi TEZUKA

In Japan, fishing has been a part of people's lives since ancient times. From a global perspective, the examples of Juliana Berners and Tsugaru Uneme prove that fishing has a cultural significance in people's lives, which transcends time and region.

Suisanhosaishi (Records of Fishery Activities) from the Meiji-period suggests that modern Japan has a rich fishing culture. These practices were actively exported overseas, and conversely, foreign fishing practices such as fly fishing were imported.

One of the key words in such fishing culture is Yu-gyo, the traditional act of hobby fishing. It is not the main source of income but rather a form of Asobi-Shigoto (earning minor subsistence from a miscellaneous work), which is separate from fishing for a living.

After World War II, Japan's fishing culture began to be influenced by the culture introduced by U.S. forces during their occupation of Japan. Among the cultural exchanges, Thomas Lester Blakemore's Yozawa Fly Fishing Area emerged as an ideal model for the development of managed fishing areas across Japan; it has been developed and inherited as Asobi-Shigoto by Japanese people living in Yozawa.

In recent years, the number of hobby anglers in Japan has been reducing due to the declining birthrate and diversification of leisure activities. However, Sakurai Fishing Tools Co., Ltd. is applying existing Japanese technology to manufacture carbon rods that are highly acclaimed worldwide.

Leon—a fly-fishing specialty store—holds fly rod-making classes based on Yoichi Miura's statement: "...the greatest joy of fishing is to make your own tools and fish with them, and if you don't make your own rod, you are throwing away half the fun." He has contributed greatly to broadening the base of the industry. In particular, his fly rods made of madake (Japanese bamboo), bring about a new way of using this material, the usage of which has been declining due to the collapse of satoyama.

Therefore, the development of fishing tackle in modern Japan has been observed to be accompanied by the essence of fishing as Asobi-Shigoto. There is a new Asobi-Shigoto framework for fishing as a "hobby with enough passion to devote to it almost as much as your main job."